アンドレ・ピエール・ド・マンディアルグ邦訳文献目録

長谷部 宗吉 編

【編者覚書】

＊Pieyre de Mandiargues, André.の作品（小説、詩、エッセイ、講演、インタヴューなど）の邦訳文献（1997年9月末現在）を採録した。現在刊行中の『澁澤龍彦翻訳全集』（河出書房新社）は採録していない。

＊採録にあたって可能な限り現物またはコピーで確認した。確認できなかったものについては「(未見)」と入れた。

＊Pieyre de Mandiargues の文献については『20世紀文献要覧大系』（日外アソシエーツ）の『フランス文学研究文献要覧 1945-1978』および『フランス語フランス文学研究文献要覧』の各版などを参考にした。「屋上屋を架する」ことにもなるが、少しでもお役にたてれば幸いである。

＊とくに凡例は掲げなかったが、配列は出版年月日の順である。叢書名（シリーズ名）は『(書名)』の後に入れた。出版（年月日）の前の数字は収録頁数（新聞の場合は面）である。また、国立国会図書館(NDL)の所蔵が確認できた単行本にはその請求記号とジャパン・マーク(JP-MARC)の番号を入れた。さらに一部のデータの最後には「あとがき」などから重要と思われるコメントを一部分引用した。

＊誤り、遺漏も多々あると思われるが、それらの情報についてはご教示をお願い致したい。例えば、『狼の太陽』の二編 「赤いパン」、「首のまぼろし」は1954年頃の雑誌に邦訳があるとのこと。1968年以前に「ダイヤモンド」の平岡篤頼訳があるとのこと。また天澤退二郎氏の訳詩等々。

＊なお、Pieyre de Mandiargues の国内研究文献目録については他日を期したい。

(1997.10.30)

アンドレ・ピエール・ド・マンディアルグ邦訳文献目録

［小説、詩、エッセイ、講演、インタヴューなど］

＊「クロリンダ」　大浜甫訳　三田文学　43巻7号,12-15(1953.9)

＊「手のひらの形而上学（書評集）」『ロベルトは今夜』(Kawade Paperbacks 8)
ピエール・クロソウスキー著　遠藤周作、若林真訳　河出書房新社
1962.9.15　所収 pp.259-260　N.R.F.誌掲載のもの
NDL 953-cK66r-E(s)（JP62-08426）

＊『オートバイ』(新しい世界の文学 24)　生田耕作訳　白水社　1965.5.5　270p　20cm
巻頭に著者の写真あり。La motocyclette の翻訳。［訳者］解説(pp.265-270)
NDL 908.3-A956（JP58-06262）

マンディアルグの作品をつらぬく基調は、アンドレ・ブルトンの言葉をかりれば、《新しい形式の幻想の探求》である。いいかえれば、日常生活のうちにひそむ、《不可思議なるもの》、《奇異なるもの》の発見である。マンディアルグの目を通じてながめるとき、われわれの身辺のオブジェは、ありふれた花も、動物も、鉱物も、建物も、家具も、すべてが魔法的な機能をおび、《未知》と、

《未見》の様相を呈しはじめる。人間の意識のなかに感覚がくりひろげるパノラマは、あまりじょうぶなスクリーンとはいえない。たえず新しい穴をうがたれ、突風にゆすぶられており、そのことが目に入らないのは、自己の平凡な《既製品》の彼方をながめようとしない人間くらいのものである。([訳者] 解説より)

＊『海の百合』(人間の文学 17) 品田一良訳 河出書房新社 1966.5.31 242p 19cm
Le lis de mer の翻訳。[訳者] あとがき (pp.235-242)
NDL 908.3-N722 (JP58-04478)

なお、本書の冒頭に掲げた「海の百合」という散文詩風の小文は、もともと原著にはなく、評論集『月時計』に載っていたものであるが、この小説の序文としてまことに適切であると判断して、原著者の了解を得てここに訳出したことを付記しておく。([訳者] あとがきより)

＊「燈火をかかげる一人の偉大な人 (ブルトンの死)」新納みつる訳 本の手帖 6巻9号(59号), 80-81(1966.11.1)

アンドレ・ブルトンの訃報は、怖るべき黒い流星のように、我々の頭上に落ちた。私は、これを冷静に語ることはできない。私は云いたいのだ。優越性とは何にもとづいて生ずる観念なのか、それは、我々から今奪い去られたばかりのこの人のような希有の存在にもとづく観念なのだ、私はそう思うのだ、と。(冒頭より)

＊『黒い美術館』(新しい世界の短編 4) 生田耕作訳 白水社 1968.1.20 251p 19cm
巻頭に著者肖像あり。
収録内容：ダイヤモンド(pp.7-45)、生首(pp.47-92)、断崖のオペラ(pp.93-126)、裸婦と棺桶(pp.127-173)、子羊の血 (pp.175-245)、[訳者] 解説(pp.247-251)
NDL953-cP62k-I (JP68-02712)

『黒い美術館』(Le Musée noir)(1946)はマンディアルグの第一短篇小説集であり、七篇の中・短篇小説を収めている。邦訳の表題は、便宜上、これを借りたが、この集からは「子羊の血」(Le Sang de l'agneau)一篇だけを採り、残りの四篇は、別な短篇集から選んだことをおことわりしておく。「断崖のオペラ」(L'Opéra des falaises)と「生首」(La Vision capitale)は、第二短篇集『狼の太陽』(Soleil des loups)(1951)から、「裸婦と棺桶」(Le Nu parmi les cercueils)、「ダイヤモンド」(Le Diamant)は第三短篇集『燠火』(Feu de Braise)(1960)から収録した。なるたけ傾向を異にする諸篇をえらび、マンディアルグの短篇作家としての全貌をうかがいうるよう心がけたつもりであるが、最初に予定した作品のうち、諸種の事情から、訳者のもっとも愛着する「ポムレイ路次」「ビアズレーの墓」の二篇を割愛する結果に終わり、当初の目的を果たせなかったことを残念に思っている。([訳者] 解説より)

＊「閉ざされた城のなかで描かれたイギリス人 [連載1]」 ピエール・モリオン [著] 澁澤龍彦訳 血と薔薇 創刊号,204-211(1968.11.1)
L'Anglais décrit dans le Château fermé の部分訳。

この小説は、前に雑誌「批評」(1967年夏季号) の誌面で、かなりくわしく内容を紹介したことがあるけれども、ブルトン亡きあと超現実主義の孤塁を守る、詩人にして小説家のアンドレ・ピエール・ド・マンディアルグが、ピエール・モリオンなる匿名のもとに書いたものと一般に信じられている。(解説より)

＊「閉ざされた城のなかで描かれたイギリス人［連載2］」 ピエール・モリオン［著］ 澁澤龍彦訳 血と薔薇 2号,202-212(1969.1.1)

＊『余白の街』(今日の海外小説 8) 生田耕作訳 河出書房新社 1970.1.15 227p 20cm
La Marge の翻訳。［訳者］解説(pp.221-227) NDL KR167-2 (JP75-24024)
アンドレ・ピエール・ド・マンディアルグの新作長編小説『余白の街』(La Marge,1967)は、さまざまな意味で、解釈と位置づけの困難な作品である。作者の矛盾した方向と意図がもつれ合い、従来の作品に見られぬ複雑さと奥行きを加え、新たな進展を示すいっぽう、既成のマンディアルグ像に期待する一部の読者を戸惑わせ、或いは失望させかねない要素をも多分にふくんでいることに、まず第一の原因が求められるであろう。([訳者] 解説より)

＊「ビアズレーの墓」 生田耕作訳 『性の深淵』(全集・現代世界文学の発見 7) 学藝書林 1970.4.30 所収 pp.213-244 NDL KE211-5 (JP75-02445)

＊「ダイヤモンド」 生田耕作訳 Le diamant の翻訳。
『現代フランス幻想小説』 マルセル・シュネデール編 窪田般彌他訳
白水社 1970.9.19 所収 pp.166-186 NDL KR141-7 (JP75-27595)

＊「汚れた歳月に・アスティアナクス マンディアルグ散文詩篇 1943・1956 (シュルレアリスムの異相)」 品田一良訳 思潮 (思潮社) 1巻2号,156-185(1970.9.1)

＊『大理石』 澁澤龍彦、高橋たか子訳 人文書院 1971.7.20 234p 20cm 肖像あり。Marbre の翻訳。
収録内容：証人の紹介(pp.5-17)、ヴォキャブラリー(pp.19-61)、プラトン的立体(pp.63-105)、証人のささやかな錬夢術(pp.107-139)、死の劇場(pp.141-212)、魚の尻尾(pp.213-221)、［訳者・澁澤龍彦］あとがき(pp.223-234)
NDL KR167-4 (JP75-25355)
私は、イメージの渉猟者という呼び名をピエール・ド・マンディアルグ氏に捧げたいと思う。([訳者] あとがきp.225より)

＊「プラトン的立体 フランシス・ポンジュに」 澁澤龍彦訳 海 3巻9号(28号), 62-75(1971.8.1)
この小説はマンディアルグ短篇集『大理石』(1953年)の中の一篇ですが、近く全訳が人文書院より刊行される予定です。(巻末の注より)

＊「小説 ポムレイ路次 (特集＝夢の錬金術師マンディアルグ)」 生田耕作訳 海 3巻10号(29号),10-19(1971.9.1) 短篇集『黒い美術館』(1946年) より

＊「小説 燠火 (特集＝夢の錬金術師マンディアルグ)」 生田耕作訳 海 3巻10号 (29号),20-25(1971.9.1) 短篇集『燠火』(1959年) より

＊「小説 サビーヌ (特集＝夢の錬金術師マンディアルグ)」 品田一良訳 海 3巻10号(29号), 26-34(1971.9.1)
この小説は短篇集『みだらな門』(1965年) のなかの一篇ですが、近く二見書房より刊行される予定です。［海］編集部

＊「無作法の極みの数々ー第三詩帖『アスティアナクス』(1964年) より (特集＝夢の錬金術師マンディアルグ)」 天澤退二郎訳 海 3巻10号(29号), 36-47(1971.9.1)

＊「性・文学・革命ーマンディアルグとの対話 (特集＝夢の錬金術師マンディアルグ)」イヴ・ド・バイゼル (インタヴュアー)、篠田浩一郎訳 海 3巻10号(29号),48-58 (1971.9.1)
このインタヴューは『プレクサス』誌 29号(1969年11月号) より訳出したものです。［海］編集部

＊「マンディアルグ氏への質問（特集＝夢の錬金術師マンディアルグ）」
海　3巻10号(29号),60-61(1971.9.1)

＊「ボマルツォの怪物（特集＝夢の錬金術師マンディアルグ）」　澁澤龍彦訳・あとがき
海　3巻10号(29号),82-109(1971.9.1)

マンディアルグのこのエッセーは、いかにも怪奇好みの彼らしく、古くからの人間の巨像願望や、植物と人間との混淆や、さてはバロック的なものの復権などといった、直接にはボマルツォの主題と関係のないような領域にまで、気ままに筆をひろげていて、なかなか読ませる。とくに最後の章は、彼自身の年来の芸術的主張であるためか、熱がこもっており、アカデミズムを痛烈に攻撃しているところが大そう面白い。([訳者] あとがきより)

＊「ボナ　愛と絵画（特集＝夢の錬金術師マンディアルグ）」 生田耕作訳　海　3巻10号(29号),131-135(1971.9.1)

本稿は〈創造の小路〉叢書（スキラ書店刊）の一巻として最近出版された同名の書物の一部ですが、改行は『フィガロリテレール』紙に先に発表された時のものをとりました。尚この叢書は近く新潮社より出版される予定です。[海] 編集部

＊「ひらかれた心で」　粟津則雄、坂上脩訳　封印された星　L'étoile scellée 5,[1]－[2](1971.10)『アンドレ・ブルトン集成　第7巻』(人文書院　1971.10.20) の付録
第7巻　NDL KR152-15 (JP75-27568)
付録　NDL Y91-E2349(JP95-92055)

以上は、アンドレ・ピエール・ド・マンディアルグ『見晴し台』(André Pieyre de Mandiargues: Le Belvédère, 1958)の一章、A cœur ouvertの全訳である。

＊「黒いエロス（総特集・エロティシズム）」 澁澤龍彦訳　ユリイカ　3巻13号,34-38(1971.11.20)

＊「満潮」 生田耕作訳・解説　山下昌也版画　芸術生活　25巻2号(270号),67-74(1972.2.1)

ここに訳出した作品『満潮』は、1959年、シュルレアリスム国際展のカタログ la Boite alerte に掲載された。同展のテーマはエロティシズムであった。(解説より)

＊『みだらな扉』 品田一良訳　二見書房　1972.3.15　205p　20cm
La porte dévergondéeの翻訳。
収録内容：序(pp.7-16)、サビーヌ(pp.17-47)、洞窟(pp.49-103)、ポルノパパスの劇場(pp.105-140)、ネズミッ子(pp.141-196)、[訳者] あとがき(pp.197-205)
各篇の原題：Introduction, Sabine, La grotte, Le théâtre de pornopapas, Le fils de rat.　NDL KR167-10 (JP75-25350)

表題を「みだらな扉」とし、序文の冒頭を「放埒な扉」としたのは、表題は前からの行きがかりと二見書房編集部の希望に添い、序文の方は、dévergondée の原題での意を忠実に伝える訳にしたまでである。([訳者] あとがきより)

＊「ヒヤシンスー詩集『孤独の河』(1968)より（総展望＝フランス現代詩）」 天沢退二郎訳　ユリイカ　4巻10号,140-145(1972.9) Ruisseau des Solitudes より

＊「黒いエロス」 澁澤龍彦訳 『エロティシズム』 澁澤龍彦編　青土社　1973.8.5　所収 pp.34-38　NDL KE185-5 (JP75-17171)

＊『ビアズレーの墓　支那風ダンディ』 オーブレー・ビアズレー挿絵　生田耕作訳　奢灞都館 [1973.10]　92p　23×18cm　Le tombeau d'Aubrey Beardsley の翻訳。
限定950部　出版年は標題紙に1898年、及び奥付に1898年3月16日とあり。
☆オーブレー・ビアズレー　あらためて説明するまでもなく、世紀末ヨーロッパの頽唐趣味を代表するイギリスの天才画家。男色傾向の持ち主で、一八九八年三月十六日、二十五歳の若さで独身のまま世を去りました。奢灞都館刊、本書の限定初版本奥付の発行年月は、ビアズレーの没年に因んで韜晦したもので、実際に上梓されたのは一九七三年十月であることを、この紙面を借りて明らかにしておきます。(サバト館編集部)：『ビアズレーの墓』(二刷)の付録、「註解」より

＊『海の百合』(モダン・クラシックス)　品田一良訳　河出書房新社　1974.3.15　221p　20cm
肖像あり。 Le lis de merの翻訳。新装版 [訳者] あとがき(pp.215-221)
NDL KR167-15 (JP75-25345)
邦訳『海の百合』は1966年河出書房のシリーズ「人間の文学」第十七巻として一度出版されており、いまそれに可能なかぎり筆を入れたものを新版として出すわけである。([訳者] あとがきより)

＊『満潮』(奢灞都叢書)　生田耕作翻訳　A.イノウエ挿絵　奢灞都館　1974.4.20　50,[2]p　18×14cm　著者の肖像あり。限定1500部。
La Marée の翻訳。訳者あとがき(pp.[1]-[2])　発売：牧神社
別に特装本三十部あり (未見)

＊「催眠術者 (書きおろし　酒の本棚⑧)」 出口裕弘訳
朝日新聞 (朝), 18(1974.11.24)
毎日新聞 (朝), 17(1974.11.24)
読売新聞 (朝), 10(1974.11.24)
Suntory Fiction & Essays　サントリー広告への書きおろし
のち『書きおろし　酒の本棚』(サントリー　1976.4　原文・翻訳併録特装版)、(サントリー　1976.9　スタンダード版) および『酒の本棚・酒の寓話』(サントリー　1983.7) に収録

＊「ダイヤモンド」 平岡篤頼訳　Le diamant の翻訳。
『フランス短篇24』(現代の世界文学) 渡辺一民編　集英社　1975.2.28　所収 pp.365-383　NDL KR141-9 (JP75-27598)

＊「ノディエの復権　無垢の夢から闇の夢へ」 田中義広訳 『シャルル・ノディエ選集 2 幻想物語集』 牧神社　1975.12.25　所収 pp.303-309

＊『狼の太陽　マンディアルグ短篇集』 生田耕作訳　白水社　1975.11.5　260p　20cm
Soleil des loups の翻訳。
収録内容：考古学者(pp.9-95)、小さな戦士(pp.97-109)、赤いパン (pp.111-113)、女子学生(pp.135-172)、断崖のオペラ(pp.173-208)、生首(pp.209-257)、[訳者] あとがき(pp.259-260)
各篇の原題：L'Archéologue, Clorinde, Le Pain rouge, L'Étudiante, L'Opéra des falaises, La Vision capitale　NDL KR167-22 (JP75-25340)
『狼の太陽』はマンディアルグの第二短篇集に相当するが、アンドレ・ブルトンが《新しい型の幻想》と評した、作者の諸特質が最も絢爛たるかたちで発揮されており、小説技法の面でもまたほとんど完璧の域に達した粒選りの作品が集められている。訳稿を進めながら、マンディアルグの小説づくりのうまさ

に、訳者はしばしばペンをおいて感歎これ久しうすることも再々であった。また全篇を貫いて流れる女性嫌悪のムードに、後年の諸作品からはうかがえぬ『オートバイ』の作者の意外な側面に気づかされたことも、作品理解のための一つの鍵としてつけ加えておきたい。([訳者] あとがきより)

＊「高電圧のスキャンダル　ー『イレーヌ』への序文」 片山正樹訳　海　8巻4号(84号),260-263(1976.4.1)

ルイ・アラゴンの作品と推定されている『イレーヌ』への序文。

＊「催眠術者」 出口裕弘訳『書きおろし　酒の本棚』 サン・アド編　サントリー　1976.4.15　所収 pp.69-76　原文・翻訳併録特装版　NDL EF27-503 (JP78-14999)

＊『レオノール・フィニーの仮面』　写真アンドレ・オスティエ　生田耕作訳　奢灞都館　1976.6.15　52p　27cm　図版多数あり。Les Masques de Leonor Finiの翻訳。訳者後記(pp.[51-52])

＊『シャガール』 シャガール [画] アンドレ・ピエール ドゥ マンディアルグ [文] 毎日新聞社　1976.6.15　211p　29×29cm　図版152　共同刊行：毎日コミュニケーションズ　書名は奥付による。標題紙等の書名：Chagall. 年譜・参考文献pp.197-201　NDL KC16-507 (JP75-43521)

＊「ベラムール (総特集　シュルレアリスム)」 須藤哲生訳　ユリイカ　8巻7号,104-116(1976.6.20)　Beylamourの翻訳。邦訳のタイトルは「スタンダールの恋愛観」

＊『ビアズレーの墓　支那風ダンディ』(奢灞都叢書) オーブレー・ビアズレー挿絵　生田耕作訳　奢灞都館　1976.7　改訳新装版　(未見)

二刷(1977.9.15)、四刷(1981.4)の情報は後出

＊『満潮』(奢灞都叢書) 生田耕作訳　奢灞都館　1976.7.20　46,[2]p　17×14cm　La Marée の翻訳。訳者あとがき(pp.[1]-[2])　青色表紙版

＊『余白の街』 生田耕作訳　河出書房新社　1976.8.31　227p　19cm　La Marge の翻訳。[訳者] 解説(pp.221-227)　新装版　NDL KR167-25 (JP75-25337)

＊『ボナ わが愛と絵画』(叢書 創造の小径) 生田耕作訳　新潮社　1976.9.10　122p　22cm　図版あり。Bona l'amour et la peinture の翻訳。訳者あとがき(pp.120-122)　NDL KC324-13 (JP75-50785)

＊「催眠術者」 出口裕弘訳『書きおろし　酒の本棚』 サン・アド編　サントリー　1976.9.30　所収 pp.79-87　スタンダード版

＊「序文」 生田耕作訳『イレーヌ』ルイ・アラゴン著　奢灞都館　1976.12.10　所収 pp.I-XIV　訳者後記(pp.[1]-[3])　第二刷は1978.4.5刊

＊「三島由紀夫について－『サド侯爵夫人』パリ上演をめぐって (本誌特別インタビュー)」　聞き手・訳　三浦信孝　海　9巻5号(97号),296-311(1977.5.1)

偶然の機会から『サド侯爵夫人』のフランス語逐語訳を引き受けた関係で、あなたの仏語訳がガリマールから出、オルセ小劇場での上演がロングランを続けている今日、こうしてお宅へ伺ったようなわけです。さしあたり、あなたがどのような経緯から三島の戯曲の翻訳を思い立たれたのか、その辺の事情からお話し願えますか。(冒頭より)

＊「パリの『サド侯爵夫人』－二月二十一日、パリ・オルセ小劇場における公開討論会 (特別取材)」 ジャン＝ルイ・バロー他　杉本紀子訳　滝田文彦解説　海　9巻5号(97号),312-328(1977.5.1)

バロー：今夕お集まりいただいたのは、ただいま当オルセ小劇場で上演中の三島由紀夫原作、アンドレ・ピエール・ド・マンディアルグ氏翻訳の『サド侯

爵夫人』についてご一緒に討論していただくためであります。これは日本の詩人が書いた特異な作品をマンディアルグ氏が翻訳したものですが、われわれはすばらしい出来であると思いますし、ご覧下さった方々の好評によってもそれは確認されております。(冒頭より)

＊『ビアズレーの墓　支那風ダンディ』(奢灞都叢書) オーブレー・ビアズレー挿絵　生田耕作訳　奢灞都館　1977.9.15　92p　17×14cm　二刷
Le tombeau d'Aubrey Beardsleyの翻訳。
付録：『ビアズレーの墓』註解 (サバト館編集部) (pp.[1]-[2])

＊『海の百合』(河出海外小説選 18)　品田一良訳　河出書房新社　1978.3.15　221p　20cm
Le lis de merの翻訳。[訳者] あとがき(pp.215-221) 1974年刊の新装版
NDL KR167-36 (JP78-10584)
付記　本書冒頭に掲げた「海の百合」という小文は、もともと原著になく、評論集『月時計』に収められているものだが、この小説の序文としてまことに適切なので、原著者の了解を得てここに訳出したものである。([訳者] あとがきより)

＊「無の素粒子の周辺 (Seigow Crystallogue 2)」　松岡生剛 (対談)　梨本真人 (通訳)　遊 (工作舎) 1003号,161-176(1978.10.10) のち『遊学の話』(工作舎　1981.10) に収録。

＊「独占インタヴュー　A＝P・マンディアルグ (イメージ「怪物」)」　牟礼田アキ (インタヴュー・訳)　小説怪物 (パルコ出版)　1巻1号,9-11(1978.11.1)
すべて返答なるものは、質問者の透明な鏡に、掻傷をつける。

＊「カンジィアミーラ抄」　牟礼田アキ訳
小説怪物 (パルコ出版)　1巻1号,12-13(1978.11.1)

＊「序」　嶋岡晨訳　『耳らっぱ』(妖精文庫 17)　レオノーラ・カリントン著　月刊ペン社　1978.11.10　所収 pp.3-8
レオノーラ・カリントンの『耳らっぱ』がアンリ・パリゾの翻訳によって公にされる以前、それはもう十五年もむかしのことだが、わたしはその原稿を読んでいた。当時、この幻想小説がわたしにもたらしたある幸福感に、突然今また、わたしはひたされている。彼女の絵画と同じように、その描写がわたしたちを魅了してやまない物語、おそらく、一女性のもっとも注目すべき作品『耳らっぱ』に、わたしはまいっているのだ。(冒頭より)

＊「アンドレ・ピエール・ド・マンディアルグ (作家の仕事場ーどのように書くか２)」
ジャン＝ルイ・ド・ランビュール (インタビュー)　岩崎力訳
海　10巻12号(116号),302-305(1978.12.1)
私はパリとヴェネツィアでしかよく書けない。
のち『作家の仕事部屋』(中央公論社 1979.5) に収録

＊『オートバイ』(白水社世界の文学)　生田耕作訳　白水社　1979.2.15　272p　20cm　巻頭に著者の写真あり。La motocycletteの翻訳。 訳者あとがき(pp.267-272) 改訳新装版　NDL KR167-40 (JP79-16865)

＊「『愛のコリーダ』のエロティシズム (特集・映画　文学から映像へ)」
鈴木啓二訳　カイエ　2巻3号,118-123(1979.3.1)
ここに訳出したのはアンドレ・ピエール・ド・マンディアルグが大島渚の映画『愛のコリーダ』に関して発言した内容を、オルネラ・ヴォルタが整理したもので、この文章は、76年5月のカンヌ映画祭の時に発行された「プレス・ブッ

ク」に掲載された。(訳者あとがきより)

＊『1914年の夜　アール・ヌーボー調』 生田耕作訳　奢灞都館　1979.4　38p　19cm
La nuit de mil neuf cent quatorze.の翻訳

＊「A.P.ド・マンディアルグー筆が進むのはパリとヴェネツィアだけ」
ジャン＝ルイ・ド・ランビュール（インタビュー）　岩崎力訳
『作家の仕事部屋』 中央公論社　1979.5.25　所収 pp.191-197
NDL KR84-80（JP79-20361）

＊『ボマルツォの怪物』 澁澤龍彦訳　大和書房　1979.6.30　169p　22cm　写真あり。
収録内容：ボマルツォの怪物(pp.5-62)、黒いエロス(pp.63-72)、ジュリエット(pp.73-100)、異物(pp.101-108)、海の百合(pp.109-115)、イギリス人(pp.117-164)、[訳者] あとがき(pp.165-169)　NDL KR167-41（JP79-23430）
『イギリス人』は一九五三年、ピエール・モリオンという匿名で秘密出版されたマンディアルグの小説である。秘密出版だから、発行所の名前も明らかでなく、オックスフォード・アンド・ケンブリッジとなっているのみだ。私がこれを翻訳したのはもう十年以上も前で、そのころ私が編集していた「血と薔薇」という雑誌の第一号（一九六八年十一月）および第二号（一九六九年一月）に載せたのだった。ただし、今度の単行本のために原稿用紙を七枚ばかり追加したことを申し添えておこう。あらためて断るまでもなく、ここに発表するのは抄訳で、全体から見れば三分の一ほどのものにすぎない。([訳者] あとがきより)

＊「夢の冒険者マンディアルグ（インタビュー)」　ミッシェル・ヌリザニー　流行通信 No.186,50-54(1979.7.1)
のち『ホモ・ロクウェンス』(流行通信　1983.11）に収録

＊『余白の街』(河出海外小説選28)　生田耕作訳　河出書房新社　1979.9.10　227p　20cm
新装版　NDL KR167-42（JP79-31811）

＊「曇った鏡（アンドレ・ピエール・ド・マンディアルグ×ボナ)」 生田耕作訳　夜想 1号,8-21 (1979.9.15)

＊「石の女（アンドレ・ピエール・ド・マンディアルグ×ボナ)」 生田耕作訳　夜想 1号,22-31 (1979.9.15)

＊「メトロ・ミラージュ（アンドレ・ピエール・ド・マンディアルグ×ボナ)」 鈴木啓二訳
夜想 1号,34-43(1979.9.15) Metro-mirageの翻訳

＊「アディーヴ（アンドレ・ピエール・ド・マンディアルグ×ボナ)」 細田直孝訳　夜想 1号, 56-72(1979.9.15)

＊「エリュアール『くるしみの都』および『愛・詩』への序文（アンドレ・ピエール・ド・マンディアルグ×ボナ)」 高村智訳　夜想 1号,74-79(1979.9.15)

＊「仮面（アンドレ・ピエール・ド・マンディアルグ×ボナ)」 神谷真介訳　夜想 1号,100-102 (1979.9.15)

＊『燠火　マンディアルグ短篇集』 生田耕作訳　白水社　1979.11.29　212p　20cm
Feu de braise の翻訳。
収録内容：燠火(pp.7-21)、ロドギューヌ(pp.23-53)、石の女(pp.55-69)、曇った鏡(pp.71-92)、裸婦と棺桶(pp.93-141)、ダイヤモンド(pp.143-183)、幼児性(pp.185-210)、[訳者] あとがき(pp.211-212)
各篇の原題：Feu de braise, Rodogune, Les Pierreuses, Miroir morne, Le Nu parmi les cercueils, Le Diamant, L'Enfantillage.

NDL KR167-44 (JP80-07651)

＊「エロティシズムと文学（特別講演）」 三浦信孝訳 海 11巻12号(128号),311-324(1979.12.1)

ここに訳出したのは、日仏演劇協会の主催により去る十月八日草月ホールで行われたピエール・ド・マンディアルグ氏の講演（原題「文学におけるエロティスム」）を録音テープから起こしたものでる。（訳者付記より）

＊「作家の天職ー書くことと話すこと（特集・『サド侯爵夫人』をめぐる三島由紀夫とピエール・ド・マンディアルグとの演劇的近親性）」 岩崎力訳 新劇 26巻12号(320号), 61-69(1979.12.1)

＊「星・幻想・文学 ピエール・ド・マンディアルグに聞く」 三浦信孝（聞きて・訳） is（ポーラ文化研究所） 7号,36-41(1979.12.10)

＊「断章（特集 ハンス・ベルメール）」 鈴木晶訳 夜想 弐,114-115(1980.8.10)

＊「夜・愛（『私の現在点』）」 天沢退二郎訳 『シュルレアリスムの詩』（シュルレアリスム読本 1） 思潮社 1981.1.15 所収 pp.130-135 NDL KR171-59 (JP81-32517)

＊『ビアズレーの墓 支那風ダンディ』（奢灞都叢書） オーブレー・ビアズレー挿絵 生田耕作訳 奢灞都館 1981.4 92,[2]p 17×14cm 四刷

Le tombeau d'Aubrey Beardsley の翻訳。『ビアズレーの墓』註解 (pp.[1]-[2]) NDL KR167-68 (JP86-28955)

＊『満潮』（奢灞都叢書） 生田耕作訳 奢灞都館 1981.4 46,[2]p 17×14cm La Marée の翻訳。 訳者あとがき(pp.[1]-[2]) 灰色表紙版 第三刷

NDL KR167-72 (JP86-28957)

＊「城の中のイギリス人」 ピエール・モリオン著 生田耕作訳・解説 海 13巻8号 (148号), 240-296(1981.8.1) 訳者あとがき(pp.294-296)

1979年になって、ようやく作者は長年かぶりつづけてきた仮面を脱ぎ、その素顔を現したのである。果たして、『城の中のイギリス人』は、著名な一流作家の匿名作品であり、その作者はマンディアルグに他ならないことが明らかにされた。…（中略）…原題は、忠実に訳せば、『閉ざされた城の中で語るイギリス人』とでもすべきであるが、邦題は適宜に短縮した。…（中略）…すでに、抄訳ではあるが、澁澤龍彦氏によって『イギリス人』の題名で同一作品の見事な翻訳が成されており、訳出にあたっては氏の名訳を無断でところどころ破廉恥に盗ませていただいたことをここに懺悔し、お詫と感謝の言葉に代えたい。（訳者あとがきより）

＊『閉ざされた城の中で語る英吉利人』 ピエール・モリオン著 ハンス・ベルメール挿絵 生田耕作訳 奢灞都館 1981.9 172p 22cm はり込み図７枚あり L'Anglais décrit dans le château fermé の翻訳。訳者後記(pp.165-172)

ピエール・モリオンの名で刊行されたマンディアルグの匿名作品を翻訳したもの。 NDL KR164-103 (JP85-06067)

ほかに特装本140部(120部か?)あり（未見）

＊「東洋の無を食べる 緑色魔人ピエール・ド・マンディアルグ（遊学・②文学の終末）」 松岡生剛（対談） 梨本真人（通訳）『遊学の話 松岡生剛と⑩人の遊学者たち』 工作舎 1981.10.15 所収 pp.54-73 NDL US15-128 (JP82-24809)

＊『城の中のイギリス人』 澁澤龍彦訳 白水社 1982.3.15 201p 22cm L'Anglais décrit dans le château fermé の翻訳。[訳者] あとがき(pp.199-201)

NDL KR167-50 (JP82-26805)

…（前略）…私は本書に係わり合ってから十数年の歳月を閲して、いまよう

やく、その全訳を世に問うことができたということになる。…（中略）…果たして、初版発行から二十六年後に出たガリマール書店の新版（一九七九年）では、作者はようやく仮面をぬいで、その素顔をあらわすとともに、執筆当時の思い出や初版発行にまつわるエピソードをみずから公開している。本書の冒頭に収録した作者の序文を参照されたい。この序文が出てしまった以上、謎に満ちた二十世紀の奇書というべき『城の中のイギリス人』について、私がくだくだしい説明をする必要はほとんどなくなってしまったようなものだ。…（中略）…なお、原題は正確には『閉ざされた城の中で語るイギリス人』である。（[訳者] あとがきより）

ほかに特装限定版2百部あり（未見）

＊「催眠術者」 出口裕弘訳 『酒の本棚・酒の寓話 バッカスとミューズからの贈りもの』（サントリー博物館文庫 7）サントリー 1983.7.11 所収 pp.51-56 原題 L'Hypnotiseur 発売：ティビーエス・ブリタニカ

NDL KE211-58（JP84-37506）

＊「『イレーヌ』新版のための序文」 生田耕作訳『イレーヌ』ルイ・アラゴン著 奢灞都館 1983.9 所収 pp.129-144 改訂新版 NDL KR151-52（JP85-06065）

＊「ＹＯＳＨＩＫＯ」 巖谷國士訳 『平沢淑子展[カタログ]』 フジテレビギャラリー [1983.9] 所収[頁付なし]、仏文併載。

＊「ＹＯＳＨＩＫＯ（平沢淑子の世界ー創造のさなかに）」 巖谷國士訳 季刊みづゑ 928号,108-109(1983.9.25) YOSHIKO; Climaise,no.144(1979)の翻訳。

なおマンディアルグには同じ題名のエッセイ(1982)があり、今回のフジテレビギャラリーにおける個展のカタログにその翻訳が収録されている。（訳者注より）[上記のもの]

＊「アンドレ・ピエール・ド・マンディアルグ」[インタビュー] 写真：田原桂一、文：ミッシェル・ヌリザニー『ホモ・ロクウェンス 芸術のなかの証人たち』 流行通信 1983.11.19 所収 pp.34-39 写真あり NDL K181-58（JP84-51204）

＊『オートバイ』（白水Ｕブックス 54） 生田耕作訳 白水社 1984.6.20 214p 18cm 巻頭に著者の写真あり。La motocyclette の翻訳。[訳者] あとがき(pp.209-214) 1979.2刊と同内容 NDL KR167-61（JP84-49033）

＊『城の中のイギリス人』（白水Ｕブックス66） 澁澤龍彦訳 白水社 1984.11.10 185p 18cm L'Anglais décrit dans le château fermé の翻訳。[訳者] あとがき(pp.183-185) 1982.3刊と同内容 NDL KR167-65（JP85-16226）

＊『黒い美術館 マンディアルグ短篇集』 生田耕作訳 白水社 1985.3.28 233p 20cm Le Musée noirの部分訳。

収録内容：サビーヌ(pp.7-29)、満潮(pp.31-52)、仔羊の血(pp.53-128)、ポムレー路地(pp.129-157)、ビアズレーの墓(pp.159-230)、訳者後記(pp.232-233)

各篇の原題：Sabine, La Marée, Le Sang de l'agneau, Le passage Pommeraye, Le Tombeau d'Aubrey Beardsley.

NDL KR167-66（JP85-42278）

最初の二篇を除いて、他は『黒い美術館』に収録。（訳者後記より）

＊「映像する立体文学ーアンドレ・ピエール・ド・マンディアルグ」『遊学 142人のノマドロジー』 松岡正剛著 大和書房 1986.11.20 所収 pp.874-879

NDL H9-85（JP87-08361）

＊「『イレーヌ』新版のための序文」 生田耕作訳 『イレーヌ』 ルイ・アラゴン [著] 奢灞都館

1987.5 所収 pp.129-144 改訳新装版

＊『みだらな扉』 品田一良訳 ペヨトル工房 1987.5.17 189p 21cm La Porte dévergondée の翻訳。

収録内容：序(pp.006-014)、サビーヌ(pp.019-045)、洞窟(pp.047-095)、ポルノパパスの劇場(pp.097-127)、ネズミッ子(pp.129-177)、［訳者］あとがき(pp.179-189)

各篇の原題：Introduction, Sabine, La grotte, Le théâtre de pornopapas, Le fils de rat. NDL KR167-E9 (JP89-53878)

前の訳文［二見書房 1972.3 刊］に少なからず手を入れた。(［訳者］あとがきの付記より)

＊「小さな戦士」 生田耕作訳 『高校生のための小説案内』 梅田卓夫 清水良典 服部左右一 松川由博編 筑摩書房 1988.4.15 所収 pp.159-163

NDL KE173-E2 (JP88-38778)

ここに掲げたのは「小さな戦士」の全文で、訳者が本書のために改訳したものである。

＊『ポムレー路地』 生田耕作訳 奢灞都館 1988.8 56p 22cm 改訳 図版多数あり。

Le Passage Pommeraye の翻訳。 NDL KR167-E5 (JP89-43293)

別に特装本100部あり。「菊判丸背状製、黒染総革装天青染。平は空押のうえ黒クロース貼込、差込口黒革装の桐紙貼函入り。写真版挿画12枚を入れた小説。」(某古書店の目録から)

＊『満潮』 生田耕作訳 奢灞都館 1988.9 46p 18×14cm La Marée の翻訳。訳者あとがき (pp.45-46) 奢灞都館の図書目録に改訳・新装版とあり。

＊『閉ざされた城の中で語る英吉利人』 ピエール・モリオン原作 ハンス・ベルメール挿絵 生田耕作翻訳 奢灞都館 1989.1 172p 22cm L'Anglais décrit dans le château fermé の翻訳。訳者後記(pp.165-172)

＊『ビアズレーの墓 支那風ダンディ』(奢灞都叢書) オーブレー・ビアズレー挿絵 生田耕作訳 奢灞都館 1989.1 97p 18×14cm Le tombeau d'Aubrey Beardsley の翻訳。 訳者注解(pp.96-97) 奢灞都館の図書目録に改訳・新装版とあり。

NDL KR167-E12 (JP90-19555)

＊「火船(Brûlot)、満潮(Hautes eaux)、壮大な猥雑(Les incongruités monumentales)、スキャンダラスな美(La beauté scandaleuse)」 吉本素子訳 『フランス詩大系』 窪田般彌責任編集 青土社 1984.4.25 所収 pp.684-687

NDL KR141-E6 (JP89-39654)

＊「『イレーヌ』新版のための序文」 生田耕作訳 『イレーヌ』(白水Uブックス81) ルイ・アラゴン［著］白水社 1989.6.10 所収 pp.7-23

NDL KR151-E7 (JP89-46795)

＊『狼の太陽 マンディアルグ短編集』(白水Uブックス82) 生田耕作訳 白水社 1989.7.10 198p 18cm Soleil des loups の翻訳。

収録内容：考古学者(pp.7-71)、小さな戦士(pp.73-82)、赤いパン(pp.83-100)、女子学生(pp.101-129)、断崖のオペラ(pp.131-157)、生首(pp.159-195)、訳者あとがき(pp.197-198) 1975.11刊と同内容 NDL KR167-E7 (JP89-51789)

＊『燠火 マンディアルグ短編集』(白水Uブックス84) 生田耕作訳 白水社 1989.7.10 180p 18cm Feu de braise の翻訳。

収録内容：燠火(pp.5-17)、ロドギューヌ(pp.19-44)、石の女(pp.45-57)、曇っ

た鏡(pp.59-77)、裸婦と棺桶(pp.79-119)、ダイヤモンド(pp.121-155)、幼児性(pp.157-178)、訳者あとがき(pp.179-180) 1979.11刊と同内容
NDL KR167-E6 (JP89-51790)

＊『黒い美術館 マンディアルグ短編集』(白水Uブックス83) 生田耕作訳 白水社 1989.7.10 191p 18cm Le Musée noir の部分訳。
収録内容：サビーヌ(pp.5-22)、満潮(pp.23-40)、仔羊の血(pp.41-103)、ポムレー路地(pp.105-128)、ビアズレーの墓(pp.129-189)、訳者後記(pp.190-191) 1985.3刊と同内容 NDL KR167-E8 (JP89-51791)

＊『満潮 短編集』 細田直孝訳 河出書房新社 1989.10.20 220p 19cm Mascaretsの翻訳。
収録内容：満潮(pp.5-30)、アディーヴ(pp.31-76)、啓示(pp.77-100)、曖昧な三角形(pp.101-120)、官能の形態(pp.121-134)、月の衣装箪笥(pp.135-152)、マロニエ(pp.153-191)、海嘯(pp.193-211)、訳者あとがき(pp.213-220)
NDL KR167-E10 (JP90-07764)

ここに訳出した短編集(1971年刊行)の原題は、一番最後に収められている作品の原題をとって『海嘯』(Mascarets)とされているが、海嘯……(中略)……という言葉は日本語としてはなじみがうすいので、翻訳刊行に当たっては、『海嘯』と言わば姉妹関係にある最初の作品『満潮』(La Marée)の題名を総題とした事をお断りしておきたい。なお、ここに収められている八編のうち、『満潮』はすでに1959年に、また『マロニエ』(Le Marronnier)は1968年にそれぞれフランスで単行本として出版され、『満潮』の方は、生田耕作氏の訳(奢灞都館刊)によって1974年にわが国に紹介されていることを附記しておく。(訳者あとがきより)

＊「死の劇場」 澁澤龍彦訳 『フランス怪談集』(河出文庫) 日影丈吉編 河出書房新社 1989.11.4 所収 pp.391-436 NDL KR167-E10 (JP90-07763)

＊「大理石」 澁澤龍彦 高橋たか子訳 『シュルレアリスムの箱』(澁澤龍彦文学館 11) 巖谷國士編集・解説 筑摩書房 1991.2.28 所収 pp.229-347
NDL KE211-E21 (JP91-37178)

＊「喜びの讃歌ーガウディ(特集＝ピエール・ド・マンディアルグ エロスの夢)」 岩切正一郎訳 ユリイカ 24巻9号,54-55(1992.9.1) Joyeusement Gaudi,1965

＊「不可思議なるマックス・ヴァルター(特集＝ピエール・ド・マンディアルグ エロスの夢)」 星埜守之訳 ユリイカ 24巻9号,56-57(1992.9.1)

＊「ハンス・ベルメールの残酷な宝物(特集＝ピエール・ド・マンディアルグ エロスの夢)」 伊勢浩朗訳 ユリイカ 24巻9号,58-69(1992.9.1) Le Trésor cruel de Hanse Bellmer.

＊「マックス・エルンストの鉤爪(特集＝ピエール・ド・マンディアルグ エロスの夢)」 吉村和明訳 ユリイカ 24巻9号,70-77(1992.9.1)

＊「ジャン・デュビュッフェあるいは極点(特集＝ピエール・ド・マンディアルグ エロスの夢)」 北村陽子訳 ユリイカ 24巻9号,78-83(1992.9.1)

＊「『月時計』より四つのエッセー(特集＝ピエール・ド・マンディアルグ エロスの夢)」 有田英也訳 ユリイカ 24巻9号,84-95(1992.9.1)
収録内容：ウニ(pp.84-86)、夢(pp.86-90)、プリア［イタリア南東部の州］の密偵(pp.90-92)、パレルモの舞踏会(pp.93-95)

これらの短編は、ジャン・ポーランの勧めで1953年から『新フランス評論』誌の「時の過ぎゆくまま」という欄に連載され、1958年に『月時計』として単

行本になった。このかん1953年には、官能的な小説『城のなかのイギリス人』が筆名で出版されている。(訳者付記より)

＊「文学とエロチスム（特集＝ピエール・ド・マンディアルグ　エロスの夢)」 岩切正一郎訳 ユリイカ　24巻9号,96-99(1992.9.1)
Un puissant moteur de la littérature,1969.

＊「ユカタン半島をはるかにのぞみ見て（特集＝ピエール・ド・マンディアルグ　エロスの夢)」 藤原禎子訳　ユリイカ　24巻9号,128-137(1992.9.1)
Préliminaires à un voyage au Mexique, in Le Belvédère,1958.

＊「テワンテペックの夜（特集＝ピエール・ド・マンディアルグ　エロスの夢)」 星埜守之訳 ユリイカ　24巻9号,138-149(1992.9.1)
「テワンテペックの夜(La Nuit de Tehuantepec)」は "La Revue de Paris" 誌、1960年2月号に掲載され、その後マンディアルグの第二エッセー集 "Deuxième Belvédère" に再録された。

＊「言語の閃光ーアンドレ・ブルトン追悼（特集＝ピエール・ド・マンディアルグ　エロスの夢)」 星埜守之訳　ユリイカ　24巻9号,174-179(1992.9.1)
「言語の閃光」は La Nouvelle Revue Française誌のアンドレ・ブルトン追悼号(1967年4月号)に掲載されたもので、1971年にマンディアルグの第三エッセー集、"Troisième Belvédère" に再録された。(訳者付記)

＊「情熱の城（特集：ジュリアン・グラック　散文詩の秘法)」 鈴木真理子訳　現代詩手帖　35巻10号,53-55(1992.10.1)　Le château ardentの翻訳

＊『海の百合』 品田一良訳　河出書房新社　1992.10.20　222p　20cm　Le lis de merの翻訳。
[訳者] あとがき(pp.215-222)　1978年刊の新装版
昨年の十二月十三日、マンディアルグが亡くなった。八十二歳、死因は不明と新聞にあった。以来、残されたボナ夫人のことが気になり、直接お悔やみに行きたいと思っていた。それが、先週九月十一日の午後に実現した。「百合」ならぬ黄色いバラの花束を抱えて、ボナを訪ねた。化粧のない、うしろに髪をなでつけただけの彼女は初めてだった。が、案じていた気持ちも憔悴も、よそ目にはない。しかし、主のいない書斎は淋しかった。壁を埋めた絵も、家具の配置もすべて前通り。机の上に目をやると、「あそこだけ片付けました」とボナ。十四年ぶりに「海の百合」の新装版が出る話をする。ボナの表情が嬉しげに和む。ふと、その眼差しが書棚の方へと向かった。追って行くと、そこに赤い表紙の、小さな『海の百合』があった。([訳者] あとがきより)

＊『余白の街』 生田耕作訳　河出書房新社　1992.10.20　227p　20cm　La Margeの翻訳。
[訳者]解説(pp.221-227)　1970年刊の新装版

＊『レオノール・フィニーの仮面』 生田耕作訳　奢灞都館　1993.5　59p　27cm　図版多数あり。Masques de Leonor Fini の翻訳。訳者後記(pp.57-59)　奢灞都館の図書目録に改訳・新装版とあり。

＊『薔薇の葬儀』 田中義廣訳　白水社　1994.4.30　190p　20cm　Le deuil des roses の翻訳。
収録内容：薔薇の葬儀(pp.5-62)、クラッシュフー号(pp.63-86)、ムーヴィング・ウォーク(pp.87-101)、パリのコブラ(pp.103-118)、影の反乱(pp.119-137)、蝮のマドリーヌ(pp.139-153)、シクスティーヌ・アグニ(pp.155-183)、訳者あとがき(pp.185-190)
各篇の原題：Le deuil des roses, Crachefeu, Le tapis roulant, Des cobras à Paris, La rébellion de l'ombre, Madeline aux vipères, Sixtine Agni.

NDL KR167-E24 (JP94-48084)

ここに訳出した『薔薇の葬儀』(1983年)はアンドレ・ピエール・ド・マンディアルグ(以下マンディアルグと略記)の最後の短篇集である。彼の死からまる二年が経過した昨年十二月に『ムッシュー・ムートン』が出たが、これは初期習作を発掘して出版したものである。だから本書の邦訳によって少なくとも主要な小説作品で未訳のものは、最後の長編『すべてが消える』(1987年)と短篇集『刃の下』(1976年)だけになった。(訳者あとがきより)

＊「われらのパリ」 飯島耕一訳 『カルティエ=ブレッソンのパリ』 みすず書房 1994.6.10 所収 pp.157-159 NDL KC726-E1923 (JP94-73537)

＊『刃の下』 露崎俊和訳 白水社 1996.5.25 193p 20cm Sous la lame の翻訳。

収録内容:一九三三年(pp.5-87)、肌とナイフ(pp.89-111)、ミランダ(pp.113-131)、螺旋(pp.133-152)、催眠術師(pp.153-162)、夢と地下鉄(pp.163-183)、訳者あとがき(pp.185-193)

各篇の原題:Mil neuf cent trente-trois, Peau et couteau, Milanda, La spirale, L'hypnotiseur, Le songe et le métro.

NDL KR167-G3 (JP96-68131)

…(前略)これでマンディアルグの小説家としてのまとまった著作は、ごく一部の遺漏(『黒い美術館』所収で未訳のままのいくつかの短編)をのぞいて、ほぼすべて本邦に紹介されることになる。『オートバイ』の映画化や『余白の街』のゴンクール賞受賞によって大衆に広く名を知られ、またその特異な作風や鏤骨の文体によって文学愛好家に畏敬の念を寄せられているとはいえ、フランス本国において必ずしも二十世紀小説の本流とはみなされていない作家が日本においてこれほどまでに好意的に遇されるにあたっては、もちろんその作品がもつフィクションとしての完成度ということもあろうが、生田耕作、澁澤龍彦の両氏を筆頭とする歴代の訳者がはたした貢献の大きさを思わぬわけにはいくまい。とはいえ『白亜紀』を初めとする詩集、『月時計』、『展望台』等の評論集、さらには『イザベラ・モッラ』以下の戯曲作品など、小説以外の著作に関して、紹介の労がほとんどとられぬままに残されていることをいい添えておこう。(訳者あとがきより)

＊『すべては消えゆく』 中条省平訳 白水社 1996.6.20 188p 20cm Tout disparaîtra の翻訳 訳者あとがき(pp.183-188) NDL KR164-G5 (JP96-74048)

…(前略)ピエール・ド・マンディアルグは1991年に逝去し、この小説は結果的に彼の遺作となったが、すでに作者自身が自作に添えた解説で、これをみずからの最後の書物にすると宣言していたし、その後、アリエット・アルメルによるインタヴューでも、彼はこの作品を繰り返し「わたしの最後の本」と呼んでいる。(訳者あとがきより)